

「永い言い訳」

2016(平成28)年7月20日鑑賞<GAGA試写室>

監督・脚本：西川美和

原作：西川美和『永い言い訳』（文藝春秋刊）

衣笠幸夫（人気作家・津村啓）／本木雅弘

大宮陽一（トラック運転手）／竹原ピストル

大宮真平（陽一の長男）／藤田健心

大宮灯（陽一の長女、真平の妹）／白鳥玉季

大宮ゆき（陽一の妻、夏子の親友）／堀内敬子

岸本信介（津村啓のマネージャー）／池松壮亮

福永智尋（津村啓の編集者）／黒木華

錦木優子（こども科学館の学芸員）／山田真歩

衣笠夏子（幸夫の妻、美容院経営）／深津絵里

栗田琴江（夏子の美容院共同経営者）／松岡依都美

桑名弘一郎（津村啓の編集者）／岩井秀人

2016年・日本映画・124分

配給／アスミック・エース

<西川美和監督らしい、主人公の「掘り下げ度」に注目！>

原作モノが大はやりの邦画界にあって、西川美和はこれまで一貫して完全オリジナルストーリーに挑んできた女性監督。彼女の長編第2作目となった『ゆれる』（06年）は最高に面白い2人兄弟の人間ドラマだった（『シネマーム14』88頁参照）し、『夢売るふたり』（12年）もそれなりに興味深い物語だった（『シネマーム29』61頁参照）。

両作とも、その原作・脚本は彼女自身が書いたもので、それは本作も同じだが、本作の原作となつた『永い言い訳』（2015年・文藝春秋刊）は第153回直木賞候補、2016年本屋大賞候補になっているからすごい。本作のプレスシートにある西川美和インタビューによれば、彼女は「でも3年に1本、映画のために2時間前後で語り切れるもの、という制約のもとに物語を作りつづけてきて、どこか消化不良を感じていたんです。それでストーリーラインと関係ないものを一度省かずして書いてから、映画にするという方法を取ってみたいと思い、最初に小説を書いてみました」と語っている。また、「本作の着想はどのようなところから生まれましたか？」との質問に対しても、「・・・誰にも言えないような、苦しい関係の終わり方をした人の物語をいすれ書いてみたい。そう思ったのが発端です」と語っている。

これを見れば、本作の主人公である衣笠幸夫（本木雅弘）の人物像については、映画のため2時間前後で語り切れるものという制約をとっぱらって、先に小説を書いたことが明らかだ。したがって本作では、一見仲の良い夫婦の夫で、人気作家の津村啓=衣笠幸夫が、実は「妻が死んで、一滴も涙を流せない男」という、かなりいやらしく、かつひねくれた人物像であることがトコトン掘り下げられている。いかにも西川美和監督らしい、そんな主人公の人物像の掘り下げ度に注目！

<子供のいない仲の良い夫婦で、もし一方が・・・？>

私の親しい友人（男性）で、仲の良い夫婦でありながら子供がない夫婦が2組いる。2人とも私より10歳ほど年下だ。私は一度離婚の経験をし、前妻との間に、再婚した妻との間に複数の子供がいるから、子育てにはほとんど関与してこなかったものの、子供に対してそれなりの愛情を持っている。したがって、子供がない夫婦（生活）というもののイメージは、想像がつかない。

本作の主人公・衣笠幸夫は今こそ人気作家・津村啓として有名になっているが、売れない時代は今も美容院を経営している妻・衣笠夏子（深津絵里）に食わせてもらっていたらしい。しかし、夏子が親友の大宮ゆき（堀内敬子）と2人でスキー旅行に出かけた直後、携帯で編集者の福永智尋（黒木華）に連絡して家に迎え入れ、一晩泊まりの情事に耽る姿を見ていると、こりやかなりすごい。本作冒頭を見る、髪の毛を切ってもらいながら2人で交わす会話もかなり刺々しいから、この夫婦の愛はかなり冷めていることがわかる。また、本作後半に登場する、夏子の携帯に未送信のまま残されていた「もう愛していない。ひとかけらも」のメッセージを見ると、それは決定的だ。

しかし、私の親友で子供のいない2人の夫婦仲はそうではなく、子供がない分余計に2人で寄り添いながら生きているはず。そう思っているが、もしそんな夫婦でも、本作のように、ある日突然妻がスキーバスの事故で死亡し、あの世にいってしまったら・・・？本作の幸夫には、夏子が死んでしまうとあれこれのボロが一気に出てきたが、ひょっとして彼らも・・・？

<本木雅弘の他、主役級の3人の演技に注目！>

モックンこと本木雅弘の演技力は、『おくりびと』（08年）（『シネマーム21』156頁参照）やNHKドラマスペシャル『坂の上の雲』（09年）等で明らかだし、『日本のいちばん長い日』（15年）における昭和天皇役もお見事だった（『シネマーム36』16頁参照）。そんな本木雅弘が演じた本作の主人公・衣笠幸夫はかなりのひねくれ者でイヤな奴だから、その人物を演じるのはかなり難しかったはず。しかし、彼はそれを見事に演じているので、その演技に注目！

他方、本作では、同じスキーバスの事故で愛する妻ゆきを失ったトラック運転手の男、大宮陽一を、ミュージシャンで演技は素人の竹原ピストルが演じている。陽一は幸夫と正反対の、頭は悪いが純真でまっすぐな男。さらに、幸夫と正反対なのが、幸夫は妻の死に遭遇しても涙を流さないのに対し、陽一はよしそう涙を流す男であることだ。いるいる、そんな男。本作における陽一は本来幸夫の引き立て役だが、ストーリー展開においては一方の主人公とも言える役割を果たしているので、陽一を演じた竹原ピストルの演技力にも注目！

さらに、是枝裕和監督の『誰も知らない』（04年）では、柳楽優弥を含む4人の子役が見事な演技を見せ、柳楽優弥は第57回カンヌ国際映画祭の最優秀主演男優賞を受賞した（『シネマーム6』161頁参照）。それと同じように、本作では陽一の長男・真平（藤田健心）とその妹の灯（白鳥玉季）という2人の子役が、本作中盤のメインストーリーの展開の中で堂々と幸夫と渡り合うので、その演技に注目！本作は冬に始まり、春夏秋冬と季節が進んでいく中で、あのスキーバスの事故と共に妻を失った幸夫と陽一の生きざまが丁寧に描かれていくから、陽一の子供たちもその1年間で大きく成長していくのは当然・・・。そんな成長ぶりを含めて、本作ではこの2人の子役の主役級の演技にも注目！

<深津絵里をはじめ、少ない出番の脇役陣もお見事！>

本作冒頭の、深津絵里演じる夏子が幸夫の髪を散髪するシーンを見ていると、その後も夏子の出番はたくさんあるものと思っていたが、予想に反してその後の夏子の出番はほとんどなし。その出番は、基本的に遺影のシーンだけだ。また、『小さいおうち』（14年）に出演した際、山田洋次監督から「割烹着が一番似合う女優」と称され（『シネマーム32』161頁）、近時その活躍ぶりが顕著な黒木華が、本作では幸夫の編集者でありながら幸夫の情事のお相手として使われていることにビックリ。そのセックスシーンが控え目だったのは少し残念だが、それでも・・・。

他方、人気作家・津村啓のいやしさが昨今のテレビ業界のいやしさと共通していることは、事故後の幸夫を追うテレビドキュメンタリーの企画を見ればよくわかる。妻の死をまっすぐに悲しむことのできない幸夫は当初この企画を断っていたが、陽一と知り合い、週に2回幸夫が大宮家で留守番することになった後、なぜか幸夫はこの企画を受け入れることに。その企画を持ち込んだ幸夫のマネージャーが岸本信介だが、岸本を演じる若手俳優・池松壮亮の近時の充実ぶりは『愛の渦』（14年）（『シネマーム32』未掲載）、『海よりもまだ深く』（16年）（『シネマーム38』）等を観ればよくわかる。

その「ドキュメンタリー番組」を撮影している時の幸夫の「キレイぶり」を見れば、マネージャーとしては幸夫に見切りをつけても良さそうなものだが、そこで見せる岸本の我慢ぶりはすごい。このように本作では、出番は少ないものの、深津絵里、黒木華、池松壮亮という3人の脇役陣もお見事！

<小さな世界を丁寧に！そこからいかなる発見を？>

去る7月9日に続けて観た『インデペンデンス・デイ リサージェンス』（16年）と『ブルックリン』（15年）は、その規模の大小において両極端な映画だった。近時、ハリウッド映画では、『インデペンデンス・デイ リサージェンス』のように、規模はパ力でかいけれども内容はカラッポ（に近い）大作が目立つので、『ブルックリン』のような小さな映画の良さが際立っていた。しかして、1年間にわたって16ミリで撮影し続けたという本作は、それ以上に小さな世界を描くもの。とりわけ本作中盤の1年間にわたって、幸夫が陽一の家に入り込み、真平と灯の面倒を見るストーリーの展開は非常に小さな世界を描くものだが、その丁寧さが際立っている。

幸夫は文章書きを専門にする人気作家だから、言葉に厳格なのは当然。そのため、冒頭を見る、散髪してもらひながらの夏子との会話も、刺々しさの他、「さちおクン」と呼ばれることへの嫌悪感や、一つ一つの言葉遣いへのこだわりが顕著だ。また、西川美和の脚本においても、幸夫が語るセリフは難解なものが多い。そのため、プレスシートによれば、本読み段階で、本木雅弘は「愛するべき日々に愛することを怠ったことの、代償は小さくない」というセリフを呪文のようにくり返し、早口言葉のようになっていたらしい。ここあたりは、弁護士として42年間やってきた私の世界とも共通点がある。

そんな幸夫が夏子の突然の事故死によって大きなショックを受けたのは当然だが、本作で興味深いのは、幸夫と陽一との出会いを経て、本作中盤に丁寧に描かれる、幸夫と真平および灯とのふれあいの中で、幸夫がさまざまな発見をし、大きく変わっていくことだ。私は今年4月に妻が約1カ月入院したため「独身生活」を余儀なくされたが、その当初は炊飯器も掃除機も洗濯機も使えない有様だった。それは、本作に見る幸夫も同じだ。私はそれなりの学習効果で必要最小限の家事はできるようになったが、それに比べると、本作に見る幸夫の家事と子育てにおける進歩の度合いはすごい。もっとも、そこにおけるホントの進歩は家事と子育てにおけるそれではなく、その中で起きる新たな発見と幸夫の変化だから、それに注目！

モックンこと本木雅弘は、『日本のいちばん長い日』でも昭和天皇の苦悩を端正な演技の中で表現していたが、本作においては、1年間にわたって体重と髪の毛を大幅に増減させながら、「妻が死んで、一滴も涙を流せない男」の苦悩を爆発させるシーンが二度登場するのでそれに注目！一度目は、妻の携帯に未送信のまま残っていた「もう愛していない。ひとかけらも」というメッセージを見つけた時。もっとも、そのうっぷんをドキュメンタリー番組の撮影中に爆発させたのはいかがなもの・・・？

興味深いのは、陽一との再三の対話の中で、一方では陽一に対して「忘れることも大切だ」とまともなお説教をする一方、陽一が新たに科学館で知り合った女性学芸員の錦木優子（山田真歩）と仲良くなり、灯の誕生日パーティーに招くと、幸夫は明らかにこれに嫉妬し、陽一に対して「どうせ俺は妻が死んだ時、他の女と寝ていたような男だから」と悪態をつくシーン。この二度目の感情の爆発によって、幸夫は陽一はもちろん、真平、灯兄妹とも決別し、再び孤独な生活を送ることになったが、西川美和脚本では、陽一が交通事故に遭うことによって、再度の復活劇が描かれるので、それに注目！

本作の『永い言い訳』というタイトルはいかにも思われぶりだが、本作のストーリーにピッタリ。幸夫の二度にわたる感情の爆発も、ある意味しっかりした「言い訳」ができないことの裏返しにすぎないことが明らかになる。もっとも、私に言わせれば、幸夫の「言い訳」は、いくら永くやっても完結するはずではなく、永久に引きずらなければならないものだと思うため、本作のラストをハッピーエンドにしたのは大いに意外！ちなみに、今年の第155回芥川賞は村田沙耶香の『コンビニ人間』、直木賞は荻原浩『海の見える理髪店』に決定したが、人気作家・津村は一体いつ文学賞を受賞するような作品を書いていたのか？そんな疑問が大きく浮上してくるが、映画として2時間余りで収めるにはこんなエンディングがベストかも・・・。

2016(平成28)年7月22日記